海外アカデミック・ディスカッション	
西洋における寺山修司と日本研究	
久保　陽子	比較社会文化学専攻
期間	2009 年 9 月 9 日～2009 年 10 月 7 日
場所	アメリカ
施設	University of Wisconsin-Madison, Department of East Asian Languages and Literature

内容報告

1. アカデミック・ディスカッションの必要性

寺山修司（1935～1983）は内外問わず広く活動した演劇人である。西洋の作品から寺山が受けた影響、彼が主宰した劇団・天井桟敷の世界 30 都市以上にのぼる巡演、世界の演劇人たちとの交流、あるいは国内に留まらない後世の演劇人に与えた影響などを考え合わせると、日本の演劇史の文脈だけではなくさらに視野を広げた研究が必要であると考え、今まで報告者の研究では、1960 年代に興ったハプニングなどの前衛芸術との関係性や、フランスの演劇人であるアントナン・アルトー（1896～1948）など西洋からの影響関係を分析、考察してきた。

その一方で、寺山作品の根源には土着性や風俗的なものが脈々と流れておりその混交が特徴でもあるが、それらが異文化でどのように受け止められたのか、なぜ西洋に認められたのか等、今後の研究で明らかにしたいと考えている。その手がかりとして国外の研究者がどのように寺山作品を捉え論じているのかということに関心をもち、寺山の研究者である Steven C Ridgely 教授のもとで、国外から見た寺山修司、日本演劇、日本文化について、自らが授業に参加することで知見を広げたいと考えた。

2. 内容報告と成果及び今後の研究における位置

報告者は Ridgely 教授の 3 つの授業に一ヶ月間参加した。

A. 日本語学

学部生のための日本語の初歩コースの授業であったが、テクストに寺山のラジオドラマ『大人狩り』と『中村一郎』を使用していた。『大人狩り』には当時の社会状況である安保闘争が下敷きにされているため、社会背景を知らない学生たちにはテクストの理解が困難であったようだが、日米安全保障条約についてアメリカ側の目から説明をしていたことが新鮮だった。『中村一郎』はテクストを読み終えた後に 3 つの問題を取り上げディスカッションしたことで学生たちの理解が非常に深いことがわかり、同時にこの作品のテーマの深さと魅力が普遍的であることが確認できた。また二つの作品ともにシチュエーションが突飛である（子供が革命を起こす、人が空を歩く）にも関わらず、学生たちは時折笑いがおきるほど楽しみながら読んでおり、寺山のラジオドラマの想像力を喚起させる言葉遣いとシチュエーション、そしてそれを支える普遍的なテーマという構造は、文化を越えても受け入れられるということが確認できた。

B. 日本文化

学部生のための広く日本文化を扱った講義であった。日本演劇については歌舞伎、能、文楽が紹介されたが、その他に 1960 年代に興った演劇活動である通称「アングラ」についてと、同時代に興った暗黒舞踏が取り上げられていた。寺山の演劇活動ではとりわけ市街劇『ノック』が中心的に紹介され、映像も流れ学生たちは興味深く見ていた。演劇の伝統に反旗を翻した「アングラ」の活動はそれぞれのグループが独自のメソッドや目的のもと新しい演劇を模索したが、天井桟敷が行った市街で演劇を上演する市街劇は、世界的にみて特異な活動であったため特に注目されていることがわかった。1992 年には市街劇『ノック』の英訳が出版されており、その英訳が所収された論文を課題として読んだ。（註 1）

その他に、近松門左衛門『心中天網島』と太宰治における心中、美空ひばりの演歌と戦後、カラオケにおける公私の空間、ジャパニーズヒップホップのアイデンティティなど大変興味深く勉強させていただいたことも収穫である。とりわけ日本研究の分野では、日本人特有の精神構造を分析した土居健郎『甘えの構造』（弘文堂、1971 年）、あるいは戦後の日本人論として戦争孤児の象徴である美空ひばり（1937～1989）についてしばしば言及され、（註 2）60 年代～80 年代にかけて活躍した寺山（戦争で父親を亡くしている）を研究するためには、日本人の戦後の精神構造や社会文化状況を考察することが有効である

と改めて感じた。

C. ジェンダー

大学院生のための授業で毎回異なるテーマを扱い、著書や博士論文を読みディスカッションするものだった。取り上げられたテーマは、毒婦もの、「青鞜」、日本の映画などで、それぞれをジェンダーの視点から考察した。報告者の研究と直結するものではないが、毎回課題として論文を読み、授業に参加することで日本研究のあり方や手法を学ぶことができた。

なお今回のプログラムの成果は、国際寺山修司学会第 8 回秋季大会（2009 年 11 月 8 日　於　愛知芸術文化センター）で「アメリカ・ウィスコンシン大学に於ける寺山修司研究」という題目で、天井桟敷の内外での業績と評価の差異を明らかにし、国外での寺山研究状況のひとつとして報告、発表する予定である。

註

1. Robert T Rolf, “TERAYAMA SHUJI AND KISHIDA RIO,” in *Alternative Japanese Drama* (University of Hawaii Press, 1992)
2. Alan M Tansman, “Mournful Tears and Sake: The Postwar Myth of Misora Hibari,” in *Contemporary Japan and Popular Culture* ed. John Whittier (University of Hawaii Press, 1996)

くぼ　ようこ／お茶の水女子大学大学院　人間文化創成科学研究科　比較社会文化学専攻

【指導教員のコメント】

寺山修司は世界的な影響力をもつ前衛演劇家であるが、戦後の新しい時代の中で、伝統から自立する若者の姿を、出身である東北地方の土俗性と結びつけて母殺しのテーマとして終生追い続けたことで知られる。このテーマ自体は日本近代文学の一つの典型ではあるが、寺山の新しさは、前衛芸術の手法を積極的に取り入れ、伝統からの自立を方法論でも実践したことである。特に、素人と玄人、シナリオ作家と演出家、舞台俳優などとの境界を取り払い、さらに観客と出演者との境界も取り払い、最終的には日常的な空間に演劇が突如出現するというハプニング的な演劇を実践し、演劇とは何か、という根本的な定義に対すアンチテーゼにまで至った。こうした寺山の活動には、これまで言われてきた以上に、アメリカの前衛芸術の影響があることを久保陽子は指摘してきた。また寺山の芸術活動歴をみれば、ヨーロッパでの数数の遠征上演による、異文化的な交流も欠かせない。同時代的に観れば、一九七〇年代前半のジョンレノンの活動に、日本の学生運動とのリンクがみられるように、ベトナム反戦運動ともリンクした若者の反権力的な運動、たとえばヒッピー文化などが世界を席巻しており、寺山の活動は、極めて日本的な要素と同時に、極めて世界的なムーブメントの一環としてみることができるだろう。

今回の久保陽子のアメリカでの学習と体験では、アメリカ人から観た、六、七〇年代の日本、そしてその中での前衛芸術運動と寺山の位置づけを目の当たりにすることになった。能や浄瑠璃などとの関わりとしてみるという巨視的な視点も日本人には難しいものだ。

久保陽子の今回の渡米体験と学習は、久保の今後の寺山研究に大きな示唆を与えたものと、確信する。同時に、寺山の国際的な研究協力という点でも大きな意義があったと認めることができるだろう。

（お茶の水女子大学　人間文化創成科学研究科　教授　大塚 常樹）